

福祉系 対人援助職養成の 現場から²⁷

西川 友理

伝わらない！！

「もーっ！なんであなたはいつも提出物忘れるのっ！」

「うーんなんか、忘れるんですよねー。すみません…気を付けます、今度こそ。」…と答えている学生が次から忘れ物をしなくなる、などという事はほとんどありません。教員側も、

「今度こそ、絶対よ！」
などと言いながら、「またどうせ忘れてくるんだろうなあ…」と頭の中ではため

息をつきます。

学生に教員の思いは、なかなか伝わりません。

「そういうの、あるある！私もさあ…」と、保育士の友達。担当しているクラスで、一人のお母さんが、子どものズボンの裾上げをしてくれないらしいのです。「お兄ちゃんのおさがりやしねえ。子どもなんてすぐ大きくなるし、裾を引き摺っているくらいでちょうどいいのよ」とお母さんはおおらかに笑っていらっしやるとのこと。

「裾を引き摺って、もしもこけてしまったらケガをしますよ。ただでさえ、まだ歩行もままならない小さいお子さんなのに…」

「だって私も忙しいもん。めくっておけばいいでしょ。」

「いや、それだけやったら、やっぱり解けてしまいますし…」

「んー…わかりました！やっときます、やっときます！」

と、最後には答えられましたが、「あのテキトウな返事は、きっとやってこないだろうなあ…」と思ったとのこと。案の定、それから先もズボンの裾上げはされていないらしいのです。

お母さんに保育士の思いは、なかなか伝わりません。

伝わった！！と思う時

相手に伝わらない、伝わりきらない。こちらは言っているのに、聞いてもらえない。

では逆に、相手に「伝わった」というのはどんな時なのでしょう。

ラブソングなどの歌詞に「思いが伝わる」というフレーズはよく聞かれますが、この「伝わる」は意中の相手が、自分の事を好いてくれる、あわよくば両想いになる、さらには付きあう事になる…という状況を指すことが多いように思います。こちらの思いを伝えても、相手が自分の事を好きになってくれない、あるいは相手には自分とは別の好きな人がいる、という状況は「思いが伝わらない」と表現することが多いように思います。

つまり、こちらの思いを表現して、それが相手の耳に届いているだけでは伝わったとは考えません。

こちらからの行動に対する、相手からの反応が、自分の意に沿わないものだと判断した場合にも、伝わったとは表現されません。

逆に相手からの反応が、こちらの思い通り、あるいはこちらの想定以上に良い行いであると判断した時に、「伝わった」と認識することが多いと思うのです。

上記の例で言えば、学生が提出物を忘れなくなった時であり、お母さんが子どものズボンの裾上げをしてくれた時、またはそれに類似する何かがあった時です。

では、「伝わらない」といううろたえ、苦しみについては、どうすればいいのでしょうか。

「伝わらない」をすこしでも「伝わった」にするため、まずは

- ・相手に言う
- ・相手からの反応がある
- ・その反応を判断する

この3つを分けて考えてみたいと思います。

思いは相手に影響を与える

「相手に言う」事については、この連載の第20回目に、書いた「Iメッセージ」などが役立つように思います。第20回から、以下に引用します。

「『私は嫌な気持ちだわ』『私はその方法はヘンだと思う』というように、私を主語にして自分の思いを表現する発

言を“Iメッセージ”と言います。“Iメッセージ”は相手の思いや行動を勝手に決めつける表現ではありません。ただ自分の思いを表現しただけにすぎないのです。それに対して、相手がどう考え、どう感じるか。それは相手の自由だから、そこまではこちらが決められることはありません。」

その後、話が始まるか、相手が怒りだすか、きちんと話をするようになるか、無視されるか、どんな方向に話が進んでいくのかはわかりません。しかし、確実に相手に何らかの影響を与えます。

教育の場面で考えると、生活環境を整えることが、大人から子どもへの、一つの自分の思いの提示になります。子どもがあらゆる情報や知識、出来事、考え方、人、モノ、経験に触れられる環境を整え、主体的に変化するチャンスに出会えるようにします。

そこで子どもが何に気づき、何を発見し、何を得るか、あるいは何も気づかないか、といったことはわかりません。しかし、生活環境は確実にその子どもに何らかの影響を与えます。

相手に影響が与えられると、何の反応もないという場合も含めて、なんらかの「相手からの反応」があるのです。

その反応に何らかの価値を見出し、思い通りになったかどうかを精査して、伝わったとか、伝わっていないとか「相手からの反応を判断」しているのです。

やさしい授業

ある若者たちに対して、人権の講義をしたことがあります。

人として大切だとされており、大人になる前に考えて身につけておいてほしい、人権についての講座。

人権については、今の社会情勢にマッチしやすい考え方はあったとしても、「答えは唯一これしかない」という正しさはないと考えています。だから、「こう考えるべきである」「こうすることが人として恥ずかしくない道である」という話をするのではあまりに説得力がなく、そもそもそういう答えを提示することは私には出来ません。

ですから、何より皆それぞれの考えや思いがあり、それらを発言したり、文章に書いて可視化したりすることを重視しました。講座のテーマに沿って、私の知っている知識や情報を提示することはしますが、なるべく「起こっている事実」「存在する制度」の説明になるように努めました。

それぞれの価値観を見つめ、また他者と擦り合わせることを勉強になると思い、それらが出来る様なワークを考えて実施しました。

講義後、数名の若者が、「やさしい講義、ありがとうございます！」

と言いに来てくださいました。

講義に「やさしい」という形容詞をつけるのは珍しいと思いました。優しい？ 易しい？ やさしいとは？

「こちらこそ、ありがとうございます！…ところで、やさしい、ってどういうことですか？」

すると口々に答える若者達。

「うーん…心の講座とか、人権教育って『命は大事です』『相手を大切にしよう』なんていうスローガンみたいなのが多いでしょ。そういう感じじゃなかった、ってこと。」

「何ていうか、聴かれている感じがした。」

「うん、そうそう。自分の中から気持ち自然に湧いてきた感じ。」

それを聞いた私は、さらに聞きました。

「そうか、自分の中から言葉が出てくる授業や、聴かれていると感じる授業は、やさしい授業やと思うんですね。」

「うん。何か、そんな感じです。ほんまに大事な事やと思えました。」

若者たちの発言は、私にとって、大変勉強になりました。

まず聴くことから、伝える事が始まる。

誰かにプレゼントを渡す時、自分の思いを届けるために、相手の思いやタイミングを考え、時には雰囲気づくりにまで尽力します。これと同じように、こちらから誰かに何かを伝える時には、まず相手の様子を見たり、話を聴いたりして、手がかりを得てからでないと、伝える言葉も手法も解りません。それらが解らない状態で何かを伝えようという事自体が、大変難しいと思います。まずは相手の状況を知り、相手が何を理解、納得し、習得しているのかを把握する事から始めます。これに応じて伝える内容や方法を工夫する必要があると思います。

聴く時には、眼と耳と心で聴きます。「次にこう言ってやろう」といった事を

考えず、ただ相手の発する言語メッセージ・非言語メッセージを受け止めることに尽力します。

冒頭に挙げた2つの例のように、相手に行動を変えてほしい、と思う時などは、そもそも相手が変わりたいと思っているかどうかを確認する必要があります。変わりたいと思っていない人に対しては、何をしても変わりにくいと思います。変わった結果、どんなことが起こるのか知らない人、わからない人には、変わったらどうなるかという情報提供が必要です。

保育の仕事

ある保育園に就職する予定の学生が、卒業直前に言いました。

「保育士にとって、子どもの主体性って何やろうってほんまに思うんです。」

「どういうこと？」

「教科書にも、保育所保育指針にも、“子どもの主体性が大切”って書かれているじゃないですか。でも、月々の保育指導案を作って、それに基づいて各週の指導案を作って、さらにそれに基づいて日々の指導案を作る。私達の意図に沿った計画にどうやったら子どもがノッてくれるのか考える。そのどこに主体性があるのかなあって。」

「うーん、そうかあ…。」

「子どもの自発的な思いや主体性を大事にしたいんですよ。でも思うようにいかないっていう事態になると、やっぱりうろたえて、どうしよう！って思ってしまう。」

変化を引き起こす仕事

保育や教育の仕事は、学生や生徒…暫定的に子どもとします…に、今正しいとされている知識や、望ましいと考えられている行動、何が正しい倫理観とされているか、などを伝えます。その後、子どもがテストで点数が取れたり、望ましいとされる行動をとったりすると「伝わった」とみなします。つまり、こちらから伝えた思い・考えに対して、子どもの考え方や行動が肯定的な変化をした時、目的が達成されたこととなります。

今の社会の中では「センセイ」と言われる仕事に「教える主体・子どもに変化を起こさせる主体」という役割が明確に求められているためでもあるかと思えます。「よいセンセイが担任になれば、子どもをなんとかしてくれる」という考え方や、子どもに「センセイの言うことを良く聞きなさい」等と伝える保護者。子どものはやし言葉にも、「いーけないんだいけいないんだ、センセイに言ってやろう」というものがあります。

センセイは子どもを教え導き、良い方向に変化させる人。センセイ方はその期待に応じなければならないと奮闘します。

しかし、周囲の大人の影響で、結果的に子どもが変化を起こすことになるとしても、「変化する」主体はあくまで子どもです。何らかの外圧に対し、どのような変化を選ぶのかという所に、子どもの主体性があります。

保育士や教員には、「自らの言動によ

り、子ども達により良い影響を与える主体である」という認識があるから、「子どもが変わってくれない」＝「言う事を聞かせることができない」という苦しみやうろたえが生まれます。これでは、子どもの変化の主体はあくまで子どもにあり、保育士や教員等の大人はそれをサポートする側、客体であるという認識を持ちにくくなってしまっているのではないのでしょうか。

けれども、多くのセンセイは、他人は自分の思い通りに動くものではないということ、頭ではよくわかっているのです。しかも相手を思い通りに動かす等ということは、子どもの主体性や自発性を無視した行為になりかねないという事も、理解しているのです。だから、「日々の指導のどこに子どもの主体性があるのか」と苦悩する学生が出て来るのです。

教員同士で話し合い、保護者とも意見交換をし、共に子どもを育てていくにはどうすれば良いのかを考える。そして何よりも子ども自身の話をよく聴き、姿をよく見る。基本的な事ですが、そこから始めていく事が大切だと思います。

子ども自身が

こうありたいと思う姿を大切に

どんな人生にしる、5歳なら5年、10歳なら10年、15歳なら15年、20歳なら20年、それぞれの環境とのやり取りの中で得てきた「経験」があります。その中で、それぞれが自分なりに周囲の人

達との関係性の中で生き抜いてきた知識と価値と判断基準があります。それらひとり一人の考えを自分で確認できるような機会を作り、可能であれば周囲の人とその考えを開示しあう。その周囲の人の一人として、保育士や教員も考えを提示する。後はその子ども自身が、何かの「身の回りの状況と折り合う方法」を見出して、変容していくように感じます。一定の社会性という限度はありますが、相手の変化を引き起こそうという時にも、それぞれ人の、それぞれの価値に基づいた「望ましい私・ありたい私」を尊重したいと考えています。

それでもまだ、「これが社会のルールだと伝えても、相手が理解し、変わってくれない」と思う時は、自分は相手の言葉を本当に聴いているのか、そして、自分が考えている「社会のルール」が本当に社会のルールなのか、ちょっと立ち止まって考える必要があるかもしれません。

思い通りにいかない時は

子どもの主体性に悩んでいた学生は今、無事に保育の仕事が続けています。最近話をする機会がありました、卒業前にこんな事で悩んでいたね、というと、キョトンとしています。

「そんなこと言ってましたっけ…？」
「うん、思い通りになってくれないと思ってしまう、って悩んでいたよ」

「思い通りにいかない事なんてもう、日常茶飯事です…！でも最近は、思い通りに行かない時には、思ったよりずっとよくなったらいいだけやん、って思うんです。だから、子どもの思いに寄り添って、任せてしまいます。子どもが夢中になって、自分のやりたいことをしている時って、本当に生き生きしてて、凄いんですよ！」

そこには、子どもをよく見て、よく聴いて、子ども自身の「こうありたい」を大事にして仕事をしている、元気な保育士さんの姿がありました。